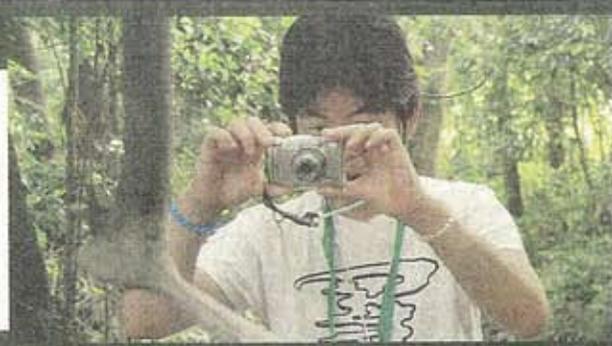


柏市で

①高校2年の松村さつきさん(16)の「自家栽培」
②中学3年の酒井耕平君(14)の「スパイダー」



「足のよくな木」を撮影する中学2年の山本和博君(12)



①写真を撮りながら「発見メモ」を書く＝柏市で
②天野講師等に相談しながら写真を選ぶ参加者。中央は森下事務局長＝横浜市南区で

「世間遺産」を写せ

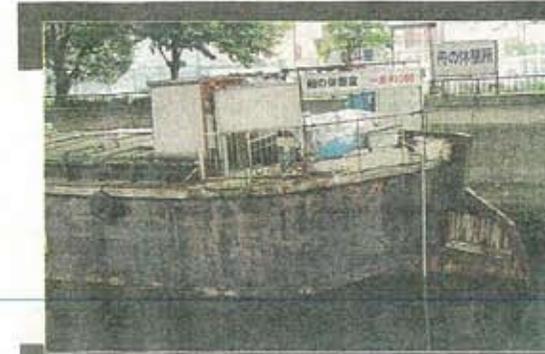
「世界遺産」ではなく「世間遺産」を探そう、という試みがある。カメラを手に、街で大切にしたいものや風景を発見する旅に出るのだ。障害者などを支援する奈良市の「たんぼの家」が始めた活動。関東では初めて開かれたワークショップをのぞく。

千葉県柏市のフリースが「あっ、このお店、屋敷」に七日、同学校の小りとシャッターを押し、中高生ら十五人が集まった。すると、ほかの子どことスタッフは、講師もたちも安心したかのよさを務める写真家の天野憲二に、撮影を始めた。一さんら四人。

「写真の良しあしを競う猫や犬、花や川、鉄塔やうのではありません。あ、廃屋などさまざま。寝そなた自身が百年後も残し、べって撮ったり、坂の上たい風景を、写真を通して上ったりと目まぐるして教えてください」と天野。撮影するたび野さんがあいさつ。参加に、発見メモに「どこ者は、写真の撮り方を教で」「なにを」「なぜわり、四グループに分か？」を記入する。一時間半の撮影を終え、あるグループは、何を撮ると、写真選びが待って撮っていいか戸惑っている。それぞれ、これぞスーパーマーケットという一枚を選ぶ。「ど前で、一人の男子中学生が、いいか分からない」

「この風景100年残したい」

と天野講師に相談する子どももいる。天野さんは「ここで悩んだり、自問自答するのが大事なんです」と話す。最後は選んだ写真を発開し、皆で共有できる表しあう。松戸市の高校二年松村さつきさん(16)は「風景がいつもと違つて、面白かった。またやりたい」と話した。翌八日、横浜市南区の「中村地域ケアプラザ」で行われたワークショップには、同地域の小中学生と父母ら十三人が参加。学校や寺、街並みなどを見直せばいい。天野さんは「世間遺産」プロジェクトが始まったのは四年前。和歌山県の熊野古道が世界遺産に認定された時、「たんぼの家」スタッフの「世界遺産も大事だけど、もっと身近で大事なところがあるよね」という意見から始まった。紙面構成・佐野貴晴



横浜市で

①小学3年鈴木琴音さん(8)の「さかみちのどちゅう」
②会社員黒部暢康さん(40)の「船の休憩」

